

ガンダム00 : Second Coming

九条ヤヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旧ユニオン・旧AEUの技術陣が共同開発した新型MS。

その性能評価、そして地上運用のために地球の軍事基地で整備をしている最中”予定の中には存在しない”ガンダムが攻撃を仕掛ける。

組織名を「Angelic」と名乗る、彼らの目的とは…？

(※オリジナル設定が多いです。ご了承ください。)

目次

第一話「来攻」

第二話「もう一つの世界」

1

10

第一話「来攻」

満天の星空が輝く夜。

森に住まう動物たちは、満月の明かりに照らされながら眠りについていた。

そんな中、ひと際まぶしい明かりを照らしている場所があった。

それは森林内に設置された軍事基地だった。滑走路に大型のMS輸送機が闇夜の静寂を乱す轟音を立てて着陸する。

輸送機からコンテナが格納庫へと運び出され、整備兵によるメンテナンスが始まる。

コンテナの中には新型のMS。この機体は現在、性能評価段階にあり、地上での運用試験の評価次第でこの機体の今後の行く末が決まる。

整備兵はいつもより、より一層気合を入れ、整備にとりかかっている。

ある者は仮眠室で横になり、ある者は愛機の側で仲間とコーヒーを嗜み、各々の夜を過ごしていた。

そこへ、ピンク色の閃光が降る。

轟音。衝撃。

仲間とのポーカーに負け、施設の外に出たオロフ・ヨーンソンが初めに感じたのは夜の涼しい風ではなかった。

けたたましく鳴るサイレン。

爆風に吹き飛ばされたオロフは頭をかかえ、顔を上げた。

「な、なんだあ？何が起こったあ?？」

穴が空いた滑走路。黒煙をあげる輸送機。

再び閃光が降り注ぎ、的確に闇夜を照らす照明を破壊していく。

「こいつあただ事じゃなさそうだなあ」

俺は衝撃によって降ってくる小さな破片をかいくぐり、格納庫へと走った。

中ではメンテナンスを中断した兵士が新型のMSを地下へと下すエレベーターへと移動している最中だった。

明らかに間に合わねえ。姿はまだ確認できていないが、おそらく襲撃しているヤツの目標はこのMSだ。こんなの予想外だぞ?！

俺は整備ハンガーを駆け上り、デッキに固定されている愛機に乗り込んだ。

パイロットスーツを着ている暇などない。

他のパイロットたちもそれぞれの機体に乗りに込んだようだ。

このまま目標だけを攻撃するのも良かったが、やはりモビルスーツが居たか。俺は射撃トリガーから指を離し、ゆっくりと機体を降下させた。

格納庫からさらに機体が現れる。どちらも先ほどと同じ機体へジnkスⅢだ。ただし片方はGNバスターソードを装備した近接戦仕様。

もう片方はロングバレルのGNビームライフルを装備した支援型の機体らしい。

俺が地面に着陸した瞬間、GNバスターソードを装備したジnkスⅢがGNドライブから粒子を放出し、こちらへと迫ってきた。

この間合いは俺の距離だ。

「レリエル、敵モビルスーツを駆逐する。」

〈ガンダムレリエル〉がこれまで射撃に使っていたGNソード改の刀身を露わにする。そこへ、加速をつけたジnkスⅢが、GNバスターソードを振り下ろした。

しかしその機体にはすでに両前腕は存在していなかった。

※※※

GNバスターソードが宙を舞い、私の真正面の地面へと突き刺さった。敵機のガンダムエクシアらしき機体は、現在切り上げの体勢をとっている。

「今だー！」

通信が入り、両腕を失ったジンクスⅢの側頭部からGNバルカンが敵機の顔に向かい発射される。

破壊はできなくとも牽制程度にはなるだろう。

私はすかさず意図を読み取り、GNロングバレルビームライフルで敵機の右前腕に装備されている兵装を狙い撃つ。

命中。激しい火花を散らした後に、敵の武装が爆散し淡い緑の粒子を散らした。

右腕と一緒に持つていくことはできなかったが、見たところ射撃兵装らしきものももう装備してはいないらしい。

勝てる。

私はそう確信し、カーソルを敵機の中央に合わせた。

すると、敵機は背面へと手を伸ばし、そこへマウントされている“得物”を取り出した。

刀身だけでも機体全長を超えており、先ほど破壊したGNソード改に比べて遥かに長く、その細身な機体には明らかに似合わない兵装。

GNソードメイス。

それが現在ガンダムレリエルが装備している武器の名前だ。

「超大型の実体剣?でも間合いに入らなきや意味がないじゃない。」

私は敵機をロックオンし、高濃度に圧縮されたGN粒子をライフルから放つ。

橙色の閃光は敵機に命中し、激しい煙幕をあげた。

手ごたえはない。だが、こちらから一方的に攻撃を続けなければ…!

煙が晴れ、第二射を叩き込もうと射撃トリガーに手をかける。

そんな彼女に衝撃が走った。

GNソードメイスを真正面に構えるガンダムレリエル。

その前には、淡い緑の膜が形成されていた。

「GNフィールド?!」

続けて二度、三度と、ライフルからビームを発射するが、それらは本体に届く前にすべて膜に阻まれ、無慈悲に辺りへと散った。

それなら…!

私はGNロングバレルビームライフルを投げ捨てると、格納庫の壁を破壊し、中からN GNバズーカを取り出した。

この武装は実体弾を射出する大型火器であり、「N GN」は「非GN粒子兵器」を意味

する。

ただし、弾倉をGNコンデンサーに換装することでビームも発射可能となる、汎用性の高い武装だ。

現在この武器には炸薬式の実体弾が装備されている。

ビームが効かないなら実弾兵装で……!

素早く敵機をロックオンし、立て続けにトリガーを引く。

しかし、相手は大型の武器を装備している事を思わせないような動きで宙を翻り攻撃を避けると、一気に加速し、距離を詰めてきた。

GNソードメイスに内蔵されているGNコンデンサーから放出された粒子が刀身を纏う。

真横から大型の刃が迫り、遠心力も相まって凄まじい衝撃が彼女のコックピットを襲った。

NGNバズーカと一緒に左腕が根元から吹き飛び、ジンクスIIIも共に真横へと弾き飛ばされる。

「このオー」

すかさず左腰部にマウントされているGNビームライフルを手に持ち、敵機に発射する。

しかし弾が到達する前に、ガンダムレリエルはジンクスⅢに飛び乗り地面へと叩きつけた。

慣性によって地面を滑り、激しい土煙を立てる。

次の瞬間には、ガンダムレリエルは片足をジンクスⅢの胴体に乗せ、機体を抑え込んでいた。

「うわああー！」

しかし彼女は諦めない。唯一残った右腕の、鋭利なマニピュレーター、GNクローをレリエルに向かって突き出す。

だが、腰部に装備されたGNロングブレイドを抜いたレリエルによって右腕が切断され、彼女の最後の足掻きはあっけなく終わった。

GNロングブレイドをマウントしたレリエルは、GNソードメイスを逆手に持ち、反撃の手段を失ったジンクスⅢの擬似太陽炉へそれを深々と突き刺した。

動力を失ったジンクスの顔から光が消えた。

GNソードメイスを背面へ戻し、格納庫へ侵入したガンダムレリエルはNGNバズーカを手を取った。

そのまま屋根を破壊し、上空へと飛ぶ。

第2話「もう一つの世界」

最近の技術の進歩は素晴らしい。

ドーム上部に取り付けられた大型の掲示板、ガンダムシリーズのコスチュームをし、談笑をする沢山の人たち。

電子世界への扉をくぐり、その光景を目にして彼が最初に抱いた感想はそれだった。

シーサイドベース、総合受付所。

そこはへガンプラバトル・ネクサスオンラインへとログインしたプレイヤーが初めて足を地につける場所だ。

ガンプラバトル・ネクサスオンライン 通称『GBN』

電脳世界「デイメンション」内で、ガンプラバトルを中心とした様々なイベントに参加できる、世界規模の最新ネットワークゲームだ。

詳細は知らないが、どうやら最近アップデートが来たらしい。

窓の外に目を向けると、そこには広大な街や景色が広がり、ガンダムシリーズに登場

するMSが滑空していた。

本当にこの世界へ来れたんだ：

そう感動に浸っている彼に

「おーい、こつちこつちー！」

人込みの奥から手を振り、こちらへと駆けてくる人物が一人。

野戦服のような地球連邦軍のジャケットを着こんだ彼の名前は『イチジヨウ・ノボル』
ガンダムシリーズとGBNという存在を教えてくれた友人だ。

そんなノボルに『ヒイラギ・ハルト』は「おう！」と答えると彼の元へ駆け寄った。

「おおおいノボル!! GBNってすごいな！ さつきも外でMSが飛んでいたし、俺もあれに乗れるのか?！」

「ああそうだけハルト。まあ色々言いたいことはあると思うがとりあえず…」

ノボルはポケットからクラッカー（注：ザクの投擲兵器ではない方）を取り出すと

「GBNデビューおめでとうー！」

パァーン！と火薬と紙吹雪がさく裂した。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「それにしてもその恰好とてもいいな。たしか〝08小隊〞に出てくるシロー・アマダとかが着ているやつだっけ？」

初めてのガンプラバトルのためのミッションを受けるため、施設内にあるミッションカウンターへと二人は歩を進める。

「そうそう。これ手に入れるまで時間かかったんだよなあ。そういうお前は結構ラフな格好だな。」

視線を下に落とすと、黒のシャツの上にくい蓬色のコート、デニムパンツに茶のブーツと、俺がログインした際のキャラ設定でセッティングした服装が再現されていた。

「ああ、選べる種類は少なかったけどこれが今できる最大限のコーディネートだぜ」
 そうこう話しているうちに俺たちはミッションカウンターへと到着した。

二年も前からGBNをプレイしているノボルに教えてもらい、俺は「チュートリアルバトル」とやらを受注した。

そのまま格納庫へと向かい、自分の機体と武装の確認をするように言われる。

俺はMSハンガーの中からこの日のために作ったガンプラを探し出すと、その姿を見

上げた。

肩部に取り付けられたスナイパーライフル。

機体各所に装備されているシールドビットに、背面のバーニアには左右に1挺ずつ新型ピストルが懸架されている。

両腰部には新しくホルスターが設置され、中には取り回しに優れるピストルが収められていた。

『ケルデイルガンダム コンプリートサーガ』

それがこの機体の名前だ。

一見すると、ただケルデイルガンダムを灰色に塗装しただけに見えるが、状況によって多種多様な銃を扱い、どんな状況にも対応するというコンセプトで制作された機体だ。

今回ハルトは初めてMSに乗るため、武装のほとんどを外し最もシンプルな状態でGNに持ってきた。

よってこれが本来の姿ではないのだ。

確認を終えたハルトが機体に入り込むと、足場が動きカタパルトデッキへと自動的に移動が始まった。

「おおい、ハルトオ」

突如コックピット内に小窓が表示され、そこにノボルの顔が表示される。

ノボルの背景とそこから聞こえる音からして、彼は先に出撃したらしい。

「しつかりカメラで録画しといてやるから、ペアアつと決めちまいなペアアつと！」

「ああ、言われなくてもやるさ。ずつと楽しみにしていたからな。」

機体がデツキへと運ばれ、足元が射出台に固定される。

光の破線が出口へと延び、上部に設置されたランプが青に変わった。

ハルトはこれまで見てきたガンダム作品の登場人物かの如く、高揚と叫んだ。

「ヒイラギ・ハルト、ケルティムガンダム コンプリートサーガ。出ます!!」

風を切る音。身体全体にかかる圧力。

次の瞬間、ハルトは架空の空へと飛び出していた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「これが君にとつての初陣となる。大丈夫なのか？」

「うん！何回もシミュレートやったし、私は…」

「違う。君の心配をしているんじゃない。僕が不安なのはミッションプランと敵に引き金を引けるかどうかだ。」

通称「リ・ビズイ」。それがノボルが駆る機体だ。

「機動戦士ガンダム 逆襲のシヤア」に登場する「リ・ガズイ」をベースとしており、かなりの改良が加えられている。

特に注目すべきなのはバック・ウエポン・システム（B. W. S.）であり、大口径のビームキャノンの他に、オリジナルの武装としてミサイルポッドや小型バルカン砲、機雷などの実弾兵装が取り付けられていた。

前に彼が言っていたのだが、リ・ビズイがMS形態になった際には上空で待機し、周囲を把握するマルチセンサーの役割や、敵機へと砲撃、爆撃をするサブフライトシステムを兼ねた支援機にもなるらしい。

そんなリ・ビズイは現在、ウエイブライダーと呼ばれる形態になっており、ハルトの真横をぴったりと飛行していた。

「このバトルは出現する敵を三体倒せばクリアになるんだ。誰もがやってる簡単なバトルだから、そう緊張しなくてもいいよ。」

「してないよ。それ以上にわくわくしてるさ。」

すると、正面に半透明の巨大なドーム状のものが見えてきた。

どうやらあそこが戦闘エリアらしい。

ケルデイルガンダム コンプリートサーガとリ・ビズイは加速をつけるとドームの中へと飛び込んだ。

正面に『MISSION START』と表示され、目標であるヘリーオーNPDが三体出現する。

リーオーは新機動戦記ガンダムWで登場した量産型MS。

今回はそれをAI-Non Player Diverが操作する無人機を倒すのが目標らしい。

「それじゃあ、俺は上空で見とくから、頑張れよー」

リ・ビズイが離脱するのを見送ると、俺は肩から主武装であるGNスナイパーライフルIIを装備し、敵へと構えた。

目前にスコープが表示され、先にいるリーオーNPDの顔がはつきりと映る。

カーソルを顔の真ん中へと持っていき、射撃トリガーに指をかける。

「コンプリートサーガ、目標を狙い撃つ!!」

機動戦士ガンダム00に登場するヘロックオン・ストラトスというキャラを意識し、俺は引き金を引いた。

銃口からピンク色のビームが射出され、それはドーバーガンを装備したリーオーNPDの顔を貫いた。

空中で機体が爆散する。

「やった、当たった！」

「ナイスショット！ほら、残りは二体だ！片づけちまいな！」

カーソルをもう一体のリーオーNPDへと向け、ロックオン。

画面の中で灰色のその機体は、身体をくの字に曲げて爆発した。

「残り二機！」

最後の敵へトドメを刺そうとスコープをのぞき込む。

しかしそこには画面いっぱいには灰色が表示されていた。

二体を狙撃している間に近づかれたらしい。

リーオーNPDが手にするマシンガンの銃口が光る。

「!!」

俺は操縦レバーやブーストを駆使してこちらへ飛んでくる猛攻を躲す。

機体の各所に弾丸が命中するが、それほど大したダメージ量ではない。

接近された機体には、スナイパーライフルみたいな銃身が長い武装は非常に相性が悪い。
よって俺は、自機の背面に手を伸ばすとそこに伸びているグリップを握り、副兵装であるGNピストルIIを敵機へと向けた。

威力は低いものの、取り回しと連射性に優れる。

「やああああー！」

射撃トリガーを引きつばなしにし、射線上の敵へ必死に反撃する。

やがて最後のリーオーNPDは身体に無数の風穴を開け、その身を空へと散らした。

「Battle end」という電子音と共に『MISSION COMPLETE』と文字が表示される。

「おおお！やったじゃんハルト！カッコよかったぜ！」

「ありがとう！俺結構操縦いけるかもしれないな……」

と、レーダーに新たな点が現れ、ハルトはそちらへと注目した。

動きからして、こっちへ高速で接近して来ている機体があるらしい。

それはノボルのレーダーにも表示されていたらしく

「なんだあれは？」

「待って、確認してみる。」

ケルデイルを地面に着地させ、頭部に搭載されているガンカメラを起動する。

その正体は、

「なんだあれ…？ガンダムデユナメス…？」

それは、ハルトが搭乗するガンプラ、ケルデイルガンダムの前身機、ガンダムデユナメスの改造機だった。

機体が近づいてくるにつれ、その詳細が明らかになる。

機体の頭上に背面から延びたビーム砲が二門並び、右側に機体全長にも達しそうな細身の三角柱が三本、左側に機体がそちらへ傾くか不安になる程の大型のコンテナがそれぞれアームの先に取り付けられていた。

脚部はスキー板のようなもの—アヴァランチエクシアのダツシユユニットだろうか…？—に乗っており、一見すると小型のGNアーマーTYPE—Dを装備しているような感じだ。

他のプレイヤーかな？

そんなのどかな考えを、《CAUTION》と鳴る警報がかき消した。
「避けるハルト!! ロックオンされてるぞ!!」

同時にデユナメスの改造機のガンカメラが露出し、右腕に装着されている三角柱が電流を纏う。

刹那、ケルデイルの右後方で大地が爆砕し、激しい土煙が舞った。

「?!」

地面がはるか後方まで抉れていた。

デュナメスの改造機の右腕に取り付けられていたのは、ただの柱でも装飾でもなかった。

弾丸の誘導、加速を行い撃ち出すための給電レール。

「まさか、レールガン……？」

「相手は何やってるんだ?! こっちは初心者がいるんだぞ?!」

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「ハロ、誤差修正お願い。」

『リヨウカイ!リヨウカイ!』

残り9発……そんなに無駄撃ちはできないね……

私は〈ガンダムマトリエル〉の右アームに装備された“GNレールガン”の弾数を横目で確認すると、情報を手に入れるために敵機へ焦点を合わせた。

……太陽炉搭載型の狙撃機体……ケルデイルガンダムか。

間違いなく戦闘を継続させるうえで、こいつは厄介となるだろう。

なら、真っ先に撃墜するのみ!

左アームに取り付けられているミサイルコンテナのハッチがスライドし、その中身が露わとなる。

「マトリエル、目標を破壊します!」

『ホウゲキ開始!ホウゲキ開始!』

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

デュナメスの改造機から無数のミサイルが射出され、それは雨のようにこちらへ襲い掛かった。

俺はGNスナイパーライフルⅡの銃身を折りたたむと、連射性能に優れた三連バルカノンモードと呼ばれる形態に変形させ、左手に握るGNピストルⅡと併用しミサイルの迎撃にあたった。

リ・ビズイもビームキャノンやバルカンを使い、自機の軸線状に存在するミサイルを撃ち落として行く。

ノボルのおかげもあり短時間で可能な限り迎撃したが、それでもミサイルの数は圧倒的だった。

地上で回避するのが難しいと判断した俺は、回避しながら迎え撃つために空中へと飛

ぶ。

と、そこで俺は気づいた。

このミサイル群は“俺を狙っていない”。

直接当てに来ているのではなく、自分の周囲にばら撒いているのだ。

それはまるで、自機をその中でできた空間に固定させるかのように……

「!!」

防御のために取り付けられた全てのGNシールドビットを密集させたが、もう遅かった。

レールガンの砲門が光り、閃光が放たれる。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

激しい爆発を確認したエイミーは左アームのミサイルコンテナを破棄すると、加速を開始した。

残るはもう一機のモバイルスーツ。機動力が高そうだけど、このマトリエルの相手じゃない!

巡航しながら敵機を探す。なかなか見つからない。

と、爆煙からピンク色の光線が、右のGNキャノンの上部を掠めた。

「なんと……」

煙が徐々に晴れてゆく。

その中から身体のうちこちを灰で黒くさせた、ケルデイルが姿を現した。

「どうして……？ 撃墜したんじゃないの……？」

『ハズシター！ハズシター！』

「うるさいハロ。次は当ててるよ」

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「ハアっ……ハアっ……」

GBNという仮想空間でも、アバターが発汗等の生理現象は再現されるらしい。

窮地を逃れた俺は呼吸を整え、額から伝う冷や汗を拭う。

危なかった……

密集させたシールドビットと、命中する前にノボルが分離したB・W・Sを割り込ませていなければ、こうして五体満足には居られなかっただろう。

「ノボル、大丈夫？」

「ああ、分離したただだから大したダメージはないぜ。しかし、何なんだアイツは？ たか

が二機に攻撃が過剰すぎるぞ?!

「うん、俺たちも無理に相手をする必要はないと思う。早く逃げよう。」

「でも絶対あのレールガンで撤退している俺たちの背中をズドンだぜ。さっきの様な攻撃をする奴が、そう簡単には逃がすとは思わねえよ。」

背を向けたらそこを撃たれ、かといってこのまま交戦をつづけてもジリ貧になるだけだ。

どうしたものか…

唸りながら敵を睨みつける。

自身の武装を確認すると、幸いレールガンの被害を逃れたGNシールドビットが四基残っていた。

「…ねえノボル。いま思いついたんだけど…もしかしたらあのレールガンを破壊できるかもしれない。」

「本当か?でもそれはアイツとやりあう事を言ってるんだぜ。できるのか?」

「ああ。けど、それにはノボルの協力が必要なんだ。嫌ならこのまま逃げるけど、どうす
るか。」



「GNレールガンの弾数は残り8、か…」

もう一機の方も確認できた。

どうやらオプシヨンパーツを分離して提供した事で、ヤツのシールドビットと合わせ二重の盾としてあのケルデイルは生き残ったらしい。

けど、そのせいでもう一機の青い方は高速移動の手段を失ったようだ。

そうなれば、もはやただの的にしか過ぎない。

カーソルを持って行き、青い機体をレティクルの中央に合わせる。

そこでその機体は動きを見せた。

両腕部から四発、真つ赤なグレネードを発射。

しかし、それは自身とは関係ない、明後日の方向へと飛んで行く。

「何？パニックになつてるの？」

と、ピンク色のビームがグレネードを貫いた。

そちらへ目を動かすと、ケルデイルガンダムが腰部の拳銃を抜きの確にグレネード弾を狙い撃つ姿があった。

爆発が起こり、煙幕が発生する。

カーソル内に捉えていた青い機体も煙に阻まれ、視界の全てが白に染まる。

「目くらましねえ…：視界がゼロでもレーダーを見れば…?!」

そこには、自機を現す点以外が存在しなかった。

自身の周りに展開されている円以外、レーダー全体に暗い靄がかかっている。

『ジャミングサレター! ジャミングサレター!』

「…なかなかやるじゃん。」

このまま真下から撃たれたら癪だ。

高度を下げ、周囲の警戒を強める。

この煙幕に便乗してここから逃げ去るのか、あるいはこちらを倒そうと何かしらの策を講じているのか。

何はともあれ、この煙幕から抜け出すのが一番の良策であることに変わりない。

バーニアからGN粒子を放出し、加速。

その勢いのまま煙幕の中から飛び出し、機体を旋回させる。

レーダーもある程度視界を取り戻した。しかし煙幕がかかっている所は表示されず、全てを把握できたわけではない。

「…さて、いつ来るかな?…：もしかしてもう逃げた?」

途端、《CAUTION》と警報が鳴り、煙幕の中からビームが飛び出した。

しかしそれは命中せず、マトリエルの頭上を通り過ぎる。

アハツ、それじゃあただ自分の位置を晒しただけじゃない。

ビームが飛んできた方にGNレールガンを向ける。

「さようならっ」

鋼鉄の弾丸が音速の域で発射され、目の前の煙が一瞬で晴れる。

しかし、そこに居たのはあのガンダムタイプではなかった。

もう一機居た青いヤツ。しかしその身体は丸みを帯びていて、ぷかぷかと浮遊している。

その傍らには格子状に配置されたシールドビットが浮かんでおり、GNレールガンの弾はそれに命中し爆散した。

「まさか、ダミーバルーン?!」

直後、別方向から飛んできた光線がGNレールガンの給電レールを跳ね飛ばした。

それは間違いなくあのケルデムガンダムの攻撃…

位置を晒したのはこちらのほうだった…!

GNレールガンに火花が走り、やがてそれは銃身全体へと広がる。

急いで投げ捨てると、轟音と共にそれは派手に爆発した。

エイミーは赤面し、残った武装のGNキャノンへ粒子をチャージ。

そちらへ向ける。

だが山吹色のビームがキャノンを貫き、それが発射されることはなかった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「ざつきからハルトばかり狙いやがって！俺を忘れんなよ！」

リ・ビズイが装備するビームライフルは、ベース機が登場した『逆襲のシヤア』でもかなりの破壊力を持っていた。

その威力は伊達ではなく、隙をつけてヤツの大型砲を破壊する事に成功する。

「よし、こんな感じでいいだろう！ハルト、逃げるぞー！」

「分かったー！」

双方ともバーニアを吹かし、敵機と距離をとる。

…ヤツはまだ武器が残っているらしい。

機体前面に展開したGNフルシールド。そこに懸架されていたデユナメスと同型のスナイパーライフルを構えるとこちらへ銃口を向けた。

俺は撤退しながら振り向くと、マニピュレーターの指基部から煙の中で囨に使ったダ

ミーバルーンを射出した。

しかも先ほど使用しなかった腰部グレネード弾のおまけ付きだ。

案の定、敵機のビームはグレネードごとダミーバルーンを貫き、巨大な煙幕が再び発生する。

「あははははは!!してやつたりだぜ!!」

ハルトと共に笑いながら、俺たちはベース基地への帰路についた。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

視界は煙幕に阻まれ、レーダーも再び表示されなくなった。

スコープに映るレティクルは青の表示を示しており、それは有効射程外を意味していた。

先刻の激しい戦闘とは違い、辺りに静寂が訪れる。

「……………」

「逃ゲタ!逃ゲタ!」

「ムキキーーーー!!何なのあいつら!!いきなり強くなってええ!もおおおお!」

「下手ツピ!下手ツピ!」

「うるさあああ!!」

本当なら今すぐにでも機動力が高い脚部推進ユニットのへダツシユユニットを使い、

機体は先のバトルで損傷した部位を修復中だ。

初めてのGBNであんな戦闘を行って殆どダメージがないのも大したものだが、とにかく修理が完了するまでガンプラには乗れない。

現在二人はバトルで稼いだ通貨「ビルドコイン」で買い物をするため繁華街へと移動している最中だ。

その道中に、ハルトが初めて降り立ったシーサイドベース、総合受付所を通るわけだが……

……何やらざわざわと騒がしい。プレイヤーの殆どが上部に取り付けられたモニターに注目している。

何が起こったのか、最寄にいたパトリック・コーラサワのダイバーに尋ねる。

「んあ？何かGBNが電波ジャックされてモニター全部にアレが映ってるらしいぜ。」

皆が見るモニターの中には、「A」の文字に天使の輪と翼、そして中央に地球が描かれたロゴデザインの背景。

そして、そのロゴで顔を隠した人の上半身が表示されていた。

それはまるで、例えるなら「SAW」というホラー映画で「ジグソウ」というキャラクターがモニターに表示された時を連想させるような、不気味さを纏っていた。

『GBNにログインしている皆様。……きげんよう。』

突如、ボイスチェンジャーを通して喋るような低い声がスピーカーから流れ始めた。『私たちはAngelic。GBNに平和をもたらすことを目標に活動する組織です。』周囲の中には端から興味がなく、その場から去るものやメニューを開き手作業を始める者も居た。

しかしそれはメニュー、携帯端末、掲示板。どこにでも現れる。

『私たちは本日から、4機の機動兵器“ガンダム”による武力介入を開始しました。口グインしているダイバーの中には、もうそれを体験した方もいると思います。』画面上に4枚の写真が表示される。

それは『機動戦士ガンダム00』に登場する機体『エクシア、デユナメス、キュリオス、ヴァーチェ』の改造機の写真だった。

デユナメスの改造機に関しては見覚えがある。それもそのはず、さつき俺たちが戦闘した機体だ。

その男（でいいのだろうか…？）は、話を続ける。

『武力介入の対象はフォース、ランクを問わず中正に行います。危害を加えるようであれば、例えばそれが運営であっても武力介入の対象となります。』

再びロゴと男性が表示される。

『私たちはAngelic。GBNを平和にすることを目的として結成された組織で

す。』

そこで画面に砂嵐が走り、クエストやトーナメント表が表示されている元の掲示板へ戻った。

「運営も敵にまわすつてよwできるわけねえじゃんwww」

「00関係のイベントかなあ？楽しみ！」

「どのくらい強いんだろう。戦ってみたいなあ。」

「危害を加えるつていったい何に？」

「そもそもGBNで武力介入つて行為が無意味じゃね？」

鼻で笑う者、何かの演出かと目を輝かせる者、SNSで情報を調べ始める者…

周囲の反応は様々だった。

ノボルはハア…と息を吐くと

「ビギナーの中には他のダイバーから嫌がらせを受けて辞めちゃう人もいるんだ…あれがイベントの告知かどうかは知らないが、初心者のハルトに過剰な攻撃をしたのは事実だ。…散々なGBNデビューになっちまったが、大丈夫か…？」

ハルトは頷いた。迷いはなかった。

「俺は何も気にしてないよ。…にしても、めっちゃ面白いなこの世界！なあ、今度俺のケルデイルで試したい事があるんだけど付き合ってくれるか?!いや、その前に面白い物だつ

「たな！早く行こうぜ！」

ハルトは特に何も気に留めていないようだ。

俺はハルトの後に続き繁華街へと向かう。

…それにしてもAngelic、か…

マスダイバー事件のように大事にならなきゃいいんだが…